

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：33906

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780484

研究課題名(和文) フリースクール運動における多様性の包摂の知識・技能の形成過程

研究課題名(英文) Study of skills and knowledge in inclusive activities in free schools

研究代表者

佐川 佳之 (Sagawa, Yoshiyuki)

椋山女学園大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：50634341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はフリースクールにおける支援者の技能が外部の支援団体との連携を通じて顕在化する過程を明らかにするものである。この課題を検討する上で、本研究では主にフリースクールにおける訪問支援活動や通信制高校との連携に着目し、フリースクール関係者への調査を実施した。この研究からは、フリースクールの支援者の技能が政策の言説や団体内部および団体間の支援者の相互作用によって編成され、変容するという側面が浮き彫りとなった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to show the process formed by staff members' skills of inclusive activities in free schools through cooperation between free schools and other support organizations. I conducted field research by focusing on free schools' supportive activities for outreach and cooperation between free schools and correspondence high schools. The results reveal that the skills of free schools' staff members changed under the impact of youth support policies and staff members' interaction in and between organizations.

研究分野：教育学

キーワード：フリースクール 連携 技能 支援者

1. 研究開始当初の背景

研究の背景について、本研究の当初の計画では、申請者は主に次のような点を記した。

日本のフリースクールは不登校の子どもにとって安心できる居場所の役割を担い、各地に様々な形で普及してきた。近年では、地域の心理・福祉専門職、学校、行政、様々な問題に関わる当事者や支援団体といったフリースクール外部の組織や個人と、フリースクールとの間で公式・非公式のネットワークなどの連携体制が構築されている。またそうした中で、フリースクールは居場所のみならず様々なタイプの支援を展開しつつある。先行研究は主に不登校問題への関心から、個別のフリースクールと支援者に注目して分析するものが主であったため、フリースクール運動に関わる外部の組織や個人との連携が新たな支援実践の形成に及ぼす作用に関しては十分に分析されてこなかった。

不登校問題が発達障害、ひきこもり、貧困など社会参加や自立に関わる福祉の問題領域と重層化し、当事者の心理・社会的困難も複雑化する状況に対して、地域の社会関係資本を活用した支援が行政・民間レベルで模索されつつある。それらの諸問題に応じて支援の領域を自律的に拡大するフリースクール運動は連携による支援の顕著な事例であり、地域の社会関係を通じて学習され、新たに生産される支援の特徴と過程の分析は、子ども・若者の社会的排除を防ぐ地域的支援の役割と方法についての具体的なモデル化を行う上で不可欠な作業だと考える。

2. 研究の目的

研究開始当初の研究目的の概要は次の通りである。

本研究はフリースクール運動の支援を「知識・技能の学習の社会過程」として捉え、その支援者が多様な当事者を包摂する知識・技能を身につけると同時に、現場の状況に応じて多様な形で編成する過程を明らかにするものである。

先述のように、不登校が発達障害、ひきこもり、貧困など様々な問題領域と重なるにつれ、現在のフリースクールは外部の支援機関や学校などとの連携を通じて多様なニーズへの対応を実践しつつある。この実態を解明するには、フリースクールに関わる多様なアクター間の折衝を通じていかに支援実践が形成されるのかについて分析する必要がある。不登校問題の範疇を超える多様な当事者に対応するための支援を実施する上で、地域における支援の機能と条件を明確化し、子ども・若者の社会的包摂を促す地域の基盤作りにつなげる知見を提示する。

3. 研究の方法

(1) 理論枠組み

本研究は以上の課題を研究する上で、Lave & Wenger (1991(1993))の正統的周辺参加論で提起された実践共同体の理論をベースに、多様な当事者を包摂する支援者の実践を分析する。しかし、実践共同体は安定的な伝統社会を前提とした概念であり、フリースクール運動のように現代の流動的で複雑な社会過程を分析する上では不十分な点が残る。

本研究では、同概念に加えて、複雑な社会環境や組織での知識・技能の可変的な学習のあり方を分析する近年の研究(福島 2010 など)もふまえながら、フリースクールの技能の実態を包括的に理解するための理論枠組みを検討する。

(2) 研究の対象と調査の概要

研究目的で示した課題を考える上で、本研究では次の調査を行った。

フリースクールをめぐるアクターの動向に関する言説の収集

フリースクールをめぐる支援や研究の動向について、言説の収集を行った。なお、研究実施期間中に、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」(「教育機会確保法」)(2016年12月7日成立)の成立をめざすフリースクール関係者の動きが活発化し、その賛否をめぐるフリースクール関係者や研究者、政治家、市民らの間で様々な議論が交わされる状況が生じた。そこではフリースクールの学びの公教育における位置づけや公的な支援などが議論となった。本研究では、こうした状況のなかで支援の技能をめぐる捉え方がどのようにあられるのかという関心を軸に、法律に関する行政・市民によるイベントなどに参加し、そのアクターの語りを観察するとともに、新聞・雑誌・書籍を通じて言説の収集に努めた。

支援の技能に関するインタビューと参与観察

上記の言説の収集作業と並行して、フリースクールで活動する支援者の連携を通じた技能のあり方についてインタビューと参与観察を実施した。フリースクールの支援の技能について、本研究では、通信制高校との連携、若者支援団体との連携に着目した。前者については、地域を限定せず各地の通信制高校との連携を行うフリースクールの支援者にその団体の実践の理念や特徴、および通信制高校との連携の背景に関するインタビューを行った。

また後者については、これまで継続的に行ってきたフリースクール A (仮名) を調査の軸とし、そのフリースクールと他の支援団体との連携に焦点を当て、両団体の関係者のインタビューと可能な範囲での参与観察を行った。ここではとくに当事者の家庭への訪問支援をとりあげ、フリースクール A において

訪問支援の技能が顕在化する過程を調査した。

4. 研究成果

(1) 先行研究の検討

先述のように、これまでフリースクールについては不登校問題という関心や個別の団体に関する研究が主であった。本研究の課題を考察する上で、近年の先行研究の視点を整理し、分析の方向性の検討を行った。この成果を「フリースクール運動の〈地図〉の粗描」『人間関係学研究』(椋山女学園大学人間関係学部)という論文にまとめた。その概要は下記のとおりである。

主なフリースクールの先行研究は不登校問題などの問題意識をもとに、エスノグラフィやインタビューによる質的調査からフリースクールにおける実践を明らかにしてきた。しかし、個々の分析が想定する当事者や支援者のイメージが共有されているわけではない。とくにフリースクール運動における支援者や当事者の語りに関する分析と、フリースクールにおいて経験の言語化が志向されていない場の分析では、分析で取り上げられる支援者・当事者の性格は異なると思われる。言い換えるならば、こうした分析の個別性はフリースクールに関わる当事者や支援者の多様性を反映していると言える。ただしその分析の個別化は、一方で多様で固有な諸実践の生成の背景に関する考察に結びついておらず、フリースクールの多様性を捉える視座が求められてくる。そこで本論文では医療人類学者・宮地(2007)のトラウマの環状島モデルからフリースクールの事例を検討し、当事者と支援者の実態の多様性を理解するための視座を議論した。

環状島モデルの意義の一つは、トラウマに関わる人と人の位置づけとその関係性、さらには関係性に内在する葛藤を明示化し、当該の問題に関与する人々の実践の俯瞰を可能にする点にあると考える。この枠組みをもとに、フリースクールAの支援者の語りや言説を分析し、同フリースクールのフリースクール運動における位置づけを分析した。この分析では、フリースクールにおける非言語的な支援と言語による支援のそれぞれの意味を考察した。フリースクールに関わる人々の言語的資源の差異に注目することで、ローカルな場における当事者とその支援の多様性のあり方を示した。

(2) フリースクールにおける支援の技能

3-(2)- の調査から次のような点が明らかになった。

訪問支援に関する分析

フリースクールAと外部の支援団体との連携に関する調査を通じて、団体間の相互作用のなかで新しい支援の形が顕在化する側面

が明らかになった。フリースクールAでは、設立以来、居場所を中心とした支援が行われてきた。しかし、近年では居場所の活動が縮小する一方で、訪問支援活動が活発となっている。申請者はこの移行の過程に着目し、その訪問支援の技能がどのように構築されるのかについて分析した。

その過程の概要を説明しよう。まずフリースクールAの代表スタッフが若者支援団体に関与することになった。その若者支援団体では、若者支援政策を背景に支援内容が居場所と訪問支援というカテゴリーで構成されている。フリースクールAの活動の中で習得された代表スタッフの居場所の支援の技能は連携先の若者支援団体の支援のカテゴリーの分類の中で再編されていく。すなわち、居場所の技能とそれをベースにした訪問支援の技能として認知されることとなった。だが、若者支援団体との連携は、二つの団体の組織的な文化の差異ゆえに、代表スタッフの葛藤を引き起こす。ただし、この葛藤は否定的な作用をもたらすというより、代表スタッフのアイデンティティを顕在化させるとともに、新しいニーズを認知させ、新しい支援のあり方をつくる契機となる。そうした組織文化の差異のなかでの技能を見ることにより、フリースクールAの訪問支援の背景を浮き彫りにした。

この調査・分析の経過を「フリースクール運動における教育・支援の多様化に関する試論」という題名で、第84回東海教育社会学研究会で発表した。さらにその後の調査で得られた資料をふまえ、2018年6月現在、論文として執筆しているところである。

通信制高校とフリースクールの連携に関する調査

通信制高校とフリースクールの連携に関して、3つのフリースクールのスタッフにインタビューを行った。学校教育を相対化する運動を背景にしたフリースクールがどのように通信制高校と連携したのかという課題を中心に調査を実施した。ここからは、地域の子どもの進路をめぐる状況に応じたかたちで連携が行われるようになった経緯やフリースクールの理念との関係を具体的に把握することができた。

今後、こうした連携がスタッフの技能をどのように編成していくのかについて分析し、成果として発表していきたい。

調査から見えてきたフリースクールの展開：今後の課題

とくに の調査において、連携のなかで顕在化したフリースクールAのスタッフの技能がその連携とは別のアクターとのつながりの中で顕在化する過程をみることができた。顕在化した技能が連携の重層化によってどのように組織化・変容していくのかについて今後、調査を継続していきたい。

また先述のように、研究期間中に教育機会確保法をめぐる運動が活発化し、実際に同法が成立・志向されるに至ったが、こうした機運のなかでフリースクールの担い手の養成に関する講座がフリースクールのネットワークや大学などで計画・実施されてきた。フリースクールと公教育との関係をめぐる議論において、スタッフの技能の養成のあり方も重要な論点になると予想される。学術的な組織やその知識の担い手である研究者が介在することによって、フリースクールの支援や教育に関する技能や知識がどのように編成され、伝達されていくのか。それに関わるアクターの言説や行動を本研究よりも射程を広げて観察することで、調査を継続していきたいと考えている。

<引用文献>

福島真人 2010 『学習の生態学：リスク・実験・高信頼性』岩波書店。

Lave, Jean & Wenger, Etienne 1991 Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation, Cambridge University Press(= 佐伯 胖訳 1993 『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書)。

宮地尚子 2007 『環状島 = トラウマの地政学』みすず書房

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

佐川佳之 2015 「フリースクール運動をめぐる 地図 の粗描」『人間関係学研究』第13号、pp.1-14、査読なし

〔学会発表〕(計 1 件)

佐川佳之 2015.8.1 「フリースクール運動における教育・支援の多様化に関する試論」第84回東海教育社会学研究会(椋山女学園大学)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐川 佳之(SAGAWA, Yoshiyuki)
椋山女学園大学人間関係学部・准教授
研究者番号：50634341

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()